校友時報

昭和49年7月20日
編集人兼発行所
秋田県能代市逢分町4番26号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　大勝堂印刷所

文化祭大幅縮少

今年度は、10月に校舎移転という大行事をひかえているため、それに伴って、例年行なわれる校内行事に支障をきたし、その大幅変更が予想される。

特に、生徒会最大の行事である文化祭が例年に比べて大幅縮少が先日学校側より通告された。

学校側からの要請
生徒委員会暗黙の了承

去る七月十一日の生徒委員会の席上で、学校側と企画部側から今年度の文化祭実施要項が発表された。それによると、期日は九月二十日（金・前夜祭）と二十一日（土）の二日間で、二十日は午後から授業をカットし、すぐに準備、そして前夜祭をグランドで行なう。二十一日は体育館とグランドを使って可能なものだけの展示（美術・書道は廊下も）や、各種催し（フォークダンス等）が行なわれる予定である。また、一般公開は、二十一日の午後から考えられている。つまり、原則として普通教室は使わずに、与えられた一日半を限られた範囲で有効に活動してほしいというのが学校側の考えである。

これに対して、特に三年生の生徒委員の間で、また、委員から伝え聞いた一部の生徒からは、例年通り一般公開を前提とした全校舎を解放しての文化祭を望む声が多かったが、学校側の事情説明により、一応納得し、承認という形になった。

その学校側の大幅縮少の理由としては、十月に予定されている校舎移転に付随する様々な準備のため、学校運営の混雑が予想される。移転の際には椅子や机の運搬に非常に時間がかかり、授業が遅れる。（三日くらい授業がつぶれることになるだろうという。）それに加えて、例年通りの規模で開催するとすれば、文化祭の後かたづけが済んで、一息つく間もなく移転のための準備と引越しに追われてしまう。以上のことを考えた上で、新校舎へ移転した他校の例を見ると、移転の年の文化祭は、やはり縮少あるいは見送りした例が多いということである。

以上のような理由で、今回の文化祭の大幅縮少は、やむをえないと学校側では考え、企画部でもこれを承認し、生徒委員会でさきのような決定となった。

文化祭準備の問題点

文化祭といえば、一ケ月くらい前からあたふたと準備を始めるのが本校の伝統になってしまった感じである。ある他県校の場合を掲げてみよう。例えば人形の国と称して美術の授業を生かして、クラス全員が夏季休業中に人形を製作し、後、みんなでその人形を持ちより、批評しあい、一ケ月前には装飾もできあがり、リハーサルまでもするという看実ものにしている高校がある。我が校の場合、金銭的なマンネリ化をたた準備期間が少なかったという理由で弁解して、まってはいなかったろうか。理想としては、出来れば半年前、少なくとも夏季休業前には細分化した計画が話しあわれていることが必要であろう。特に今年度のり越えていくといった、でくまずしてまでも準備を開始するべきであろう。

いずれにしろ縮少された新しい能高祭スタイルを作り上げていくか、それを模索していくのが我々の課題であろう。

清掃の徹底を
―新校舎移転を控えて―

説　部

阿部（前）校長は、機会あるごとに「ゴミを散らかさず、拾い集めよう」と言われたものである。当時、校内の清掃不徹底は異常であった。サボリはともかくも、基本的な掃いたり、拭たりすることさえ、まともに出来ないありさまだった。当然、教室のすみや階段のフチのあたりは、こんもりと砂や綿ぼこりが積もっていた。外履きと内履きの区別をしている人もほとんど無く、これと、紙クズの即時発散の威力はものすごく、とうていあるものではなかった。

生徒指導部が各教室に張り出していたおフダ（清掃の徹底に関する……）も、拝む人さえいるかいないかであった。毎日の清掃点検に、そのクラスによっては何ら反省のメドとされることもなく、黒板ふきでも消されていた。

それからの一年半、校庭の各所にクズカゴが置かれ、進んでゴミを拾い、また生徒といっしょに掃除をし、結果を点検したりする教師の姿が見うけられた。

そして現在は、放課後校内を回ってみると、そうきんで拭かれてピカピカの廊下も目につくようになったが、隣に、クッキリと色分けされたようにぼろっぽい所が続くといった具合である。要するに、クラスごとの、取りくみ方の姿勢が現われてきたのではないだろうか。

もう耳にタコができた言葉であるが、十月末から新校舎である。現在の体制であっては、数年のうちに、新しさが失なわれてしまうことであろう。リノリウムの床はキズがつき易く、時々、ワックスで磨かなければならないであろうし、コンクリートの壁は一度汚れるとなかなかもとには戻らない。教師はこれらを懸念しており、生徒に自覚を促している。

市内でも数年前、改築が行なわれた能高は、訪問するたびに、そ

四十九年大学入学状況

ことしの大学受験生総数は全国で七五万人（現役五六万浪人十九万）で現浪とも昨年度より増加している。本校では現役二七人、浪人一七二名が大学、短大へ受験した。有名大学に集中するいわゆる大学選択時代を反映して、数字の上では八十%近く合格できる筈なのが、現役生の合格率は全国で六五・七十%、本校でも受験者数で合格延数を割った合格率では七十%、実際に進学した生徒の割合は五四%と低かった。これは一人平均四校の受験校で力のある者は数校にも合格し、反面一校もうからない例が多かったことを示している。

併願率の増加によって有名私大は史上最高の志願者増で、それだけ難関校がより難関になったのも事実だが、本校ではこういう私立の難関校への合格は最近多くなり、この方面での健闘がたたえられる。

反面、国立大の志願者、合格者共に減少している。進路、適性その他の面で国立がよいのか私立がよいのか簡単には言われないが、とにかく本校入学当初には国立大志望者が圧倒的に多い事実を考えると国立大の不振はいかにもさびしい。今後の健闘を期待したい。

学生のみせ　キムラヤ　畠町　2―5535

たくましさとは

学校長　鎌田　宏

私は物事に対して大上段に構えることを好まない。できるなら、いつも平常心を保ち、平静な態度で事に臨みたいものだと思っている。だから若い諸君に対してもそれを願っているのである。

まあ、しかし、これはなかなかむずかしいことで、平静を保ってさえおれば、何か起っても正しく見つめ、正しく処理することができるし、自分に何か課せられてもすなおにそれに立向かうことができるのに、あわてたり、他を頼ったり、必要以上に声を荒立てて騒ぎたりしているのによく出会う。知恵者のすることではない。

じゃ、どうすればその平常心が養えるのかということなのだが、まず、日常めぐり合うことを決して避けたり逃げたりしないことである。一つ一つぶつかってのり越えていくといった、でくまずしてまでも準備を開始するべきであろう。

こういう気持ちでいれば、ことせこせしないし、恐れないし、態度も堂々として心に余裕が出てくる。たくましい頼りになる若者というのは、何のことはない、こういう人間のことなのである。

私は、何事にも一歩もひかず眼前のことに集中して当るべきだと言っているが、以上のように考えるからなのである。

今出会っているさまざまなことの中に、実は大きな価値がひそんでいるわけで、それを自ら捨て去ってはならない。めんどうがったり、ごまかしたりすると、いずれそのうちそういう傾向の人間を自ら作ってしまうことになる。

私はだから、文句なしに平然と何でもやっていく人間になろう、みんなにもそういう態度であってもらいたいと念願するわけである。

こういう気持ちでいれば、克服した時、初めてその人間の価値ある生が始まるのだ。そういう点においては、生きたいから自殺をするのだともいえる。それにつけても生の代償としての死としたら何と大きな代償であろう。

▽芥川の河童で、生まれて来る子に父が出生の意志を尋ねるところがある。自分の意志で生を選択できたとしたらどうだろう。生まれて来たことへの不可抗力に悩む人間にとって消滅の極限まで近づけてくれるものは死以外の何物でもなかろう。しかし生の選択は人間に許容されない。

▽何物かが異様な狂気の中で過ぎ去ってゆく。内では現実に必死になって対処し、外ではなおかつ極限の快楽を求め、そしてそうすることだけが彼等の唯一の虚無の安らぎなのだ。ただ時の戯れの中ですべては過ぎ去ってゆく。無惨にも。

▽今ここにこうして存在していることが大切なのだ。我々は自らの消滅を求めてはならない。それが故にまた我々は生きなければならないし、いかなる行動をすべきか、考える時きている。

点描

▽今君の身近にいる人間が自殺したとしよう。あるいは、未遂に終ったとしよう。君は何を感ずるであろう。君は生きている。現にこうして。生と死が常にあやふやな状態な人でも、生存欲に燃えている人も、生まれたばかりの泣き叫ばんでいる赤ん坊も、流され流れるままに生きている人も、誰も知らない明日を無意識のうちに信じて生きている。生きているとは何と不安定な不確実な存在なのだろう。

▽動機なき自殺々とか若者よなぜ死を急ぐ、自らの生を弄ぶなんということがマスコミによってやかましくとりたてられ危険な遊びとして自殺を論調している。誰がその人間を死にまで至らしめた苦悩を本当に理解できよう。生の苦痛は人間を死の境地に立たせることがある。そこを切り抜け、克服した時、初めてその人間の価値ある生が始まるのだ。そういう点においては、生きたいから自殺をするのだともいえる。それにつけても生の代償としての死としたら何と大きな代償であろう。

▽不幸にして生を選択できたとしたらどうだろう。生まれて来たことへの不可抗力に悩む人間にとって消滅の極限まで近づけてくれるものは死以外の何物でもなかろう。しかし生の選択は人間に許容されない。

▽何物かが異様な狂気の中で過ぎ去ってゆく。内では現実に必死になって対処し、外ではなおかつ極限の快楽を求め、そしてそうすることだけが彼等の唯一の虚無の安らぎなのだ。ただ時の戯れの中ですべては過ぎ去ってゆく。無惨にも。

▽今ここにこうして存在していることが大切なのだ。我々は自らの消滅を求めてはならない。それが故にまた我々は生きなければならないし、いかなる行動をすべきか、考える時きている。

KODAK　SAFETY　FILM
夏を美しいカラー写真で！
西巻写真工房
中和通り　T②－0068
→11A　→11B　→12A

MEN'S CORNER
TOP
のしろ・やなさまち6-19 TEL 2-0431

メガネの　カモヤ
畠町　TEL (01855) 2－3740

本校指定
フルーツパーラー
カスミ
柳町　TEL 2－5713

PANTS☆☆SHOP
学生服

秋林運動具店
北高通り　TEL 2－3257